

全 全

彫刺科第四年

加藤 一郎 山口平  
鮎澤 秀夫 長野士

彫金科第四年

清水 龜藏 廣島平

蒔絵科第四年

國重 篤介 山口士

十月廿五日鑄金科一年生一人ノ追試業ヲ行ヒタルニ合格セシニ依

リ全二年へ編入ス

本年中繪畫科卒業生ニシテ尋常師範學校尋常中學校高等女學校圖

畫科教員免許狀ヲ受領セシモノ七人又生徒ノ願ニ依リ在學證明書

ヲ交付シタルモノ七十二人アリ

前記ノ外本年間ニ於ケル入退學其他生徒ニ関スル事項ヲ舉クレハ

左ノ如シ

規則第十九條ニ依リ譴責シタルモノ

一人

全 上 退學ヲ命ジタルモノ

二人

再入學ヲ許シタルモノ

二人

死亡シタルモノ

一人

研究科満期

二人

疾病事故等ニ依リ退學ヲ許シタルモノ

十四人

(道庁府県別各科学徒現員表および歳出・歳入、所有物件に関する事項

は省略)

### 解説

#### 1 鍛金科設置

鍛金科設置のための具体的な動きが起こったのは明治二十六年末のこと  
で、左の記事が示すように帝国議會に鍛金科教場建築費二、六七〇円およ  
び同科教官俸給その他諸費一、四九〇円の予算案が提出された。

總豫算説明(文部省所管)〔中略〕東京美術學校鍛金科教場建築

東京美術學校に於て本邦中特絶の鍛金術を挽回進捗するの目的を以て鍛  
金科を設置し實用の工藝に應用する方法を研究せんが爲め該教場の建  
築を要す依て其費額二千六百七十圓を本年度歳出臨時部文部省所管第二  
款第四項に豫算したり〔下略〕

(明治二十六年十二月二日『教育新聞』)

○東京美術學校の政府支出金に就き

東京美術學校に於ける明治二十七年年度の政府支出金の豫算は一萬九千百  
六十八圓三十三錢にして二十六年年度の豫算額一萬六千六百四十三圓三十  
三錢に比すれば二千五百圓二十五錢の増額にて其の理由は書記の定員を  
減じ及び諸般の費途を節減し教務上必要の費用に充てたるも仍ほ特に増  
費を要するものあり本邦中古以來金工精妙にして殊に金屬を鍛煉し種々  
の器品を製作するの技術に長じ特有の意匠趣味を備ふるを以て益々其技  
術を擴張して現今實用の工藝に適應せしめば其效益々大なるべく且つ今日  
鍛金の法に熟達する者極めて少なきを以て此本邦特得の技術者を養成す

るは目下の急務なり依りて該校に於て鍛金科を新設し授業を開始するに付教官の俸給其他の諸費千四百九十圓を増し又該校生徒卒業試験製品は蒔繪の如き殊に高價の材料を要し到底生徒の自辨に堪ふべきにあらざるを以て其費用八百四十五圓を増し又該校の舎全部の種修繕を要するも從來經費に餘裕なきが爲め其費用を辯ずること能はざるに付其の費用百九十圓を増し扱ては合計二千五百二十五圓の増額なりと

(明治二十六年十二月九日 同前)

この予算案は削除され、そのため岡倉校長は翌二十七年、「二十八年度經費ニ付上申」および「美術教育施設ニ付意見」の中で再度要請を行なつた。その結果、翌二十八年三月、第八議會に於ける「美術学校拡張法案」の可決をもつて設置が内定したのである。同年同月二十九日には桜井正次が囑託として採用され、授業開始の準備が始められた。桜井正次は正正次と称した刀鍛冶で、採用の前年には文部省が本校に依頼した天皇銀婚式奉祝のための猷納大刀の製作にも携わっている。岡倉校長は同科の指導者としてはじめ大阪の鍛金名家板尾清春(天保十三年〜明治四十四年)を採用する考で、採用内定にまで至つたが、その後清春が病氣を理由に断つて来たため、実現しなかつた。左記は校長が清春に重ねて承諾を要請したときの手紙である。

拜誦 先日御面会の節は失礼申上候 爾後益御機嫌宜く恭賀之至ニ存

候 陳レハ美術学校御就職の儀御承諾被下鍛金術の進歩上殊ニ喜はしく存居候処御紙面ニ接し病氣の故ヲ以て御辞退の趣寔ニ残念ニ存候 御承知の如く本邦鍛金工の術ハ古ニ高度の精巧ニ達し候へ共昨今ニ至リテハ萎縮不振寔ニ悲むべき有様ニ有之 幸ひに先生年来御工夫の次第モ御座

候ニ付此際御東上相願御技術ヲ生徒ニ伝へ本邦特殊の工芸ヲ継続為致度存居候処今更御辞退の儀遺憾ニ耐へス存候 軼地の事は御身体の為メ氣遣しき次第候へ共東京とても方角ニより必しも不健康の処ニは非ス候間一旦は御転住御試被下候て猶愈よ御障りニも有之候ハ、其上ニて御相談候ハ、宜敷何分技術継続の為メ殊に御奮励願ハしく存候 又他ニ御事情等有之候儀ニ候ハ、詳細御申越相成度 不取敢御考慮伺試ミ候 斯道ニ対スル一の務めと思召し御請相成度希望ニ耐へス候 忽々頓首

四月廿四日

岡倉寛三

板尾清春君

小生事昨夜伊勢より帰京 今朝御手紙ニ接し不取敢愚意申述候 乱筆御推説被下度

(『岡倉天心全集』第六卷。昭和五十五年。平凡社)

清春に代わつて採用されたのは平田惣之助(明治四十年宗幸と改名)であつた。宗幸は東京の鍛金名家で、採用前には宮内省より帝博へ委託された錦鶏の間の尾長鳥置物製作(明治二十五年)や通信省より本校へ依頼された天皇銀婚式奉祝のための銀製花瓶製作(同二十六年)を担当し、名声をあげた。明治二十八年六月二十七日に本校囑託となり、大正六年帝室技芸員、同七年本校教授となつている。

明治二十八年九月五日、左記の文書をもつて鍛金科が設置された。

庶第三一〇號

本校今般鍛金科設置相成候ニ付テハ其学科課程別紙之通相定本校規則第三條學科課程彫金科ノ次へ差加へ候様致度此段仰高裁候也

明治廿八年八月廿七日

文部大臣侯爵西園寺公望殿

東京美術学校長 岡倉覺三

〔本校関係法令書類〕別紙なし

未専甲六五七號

東京美術学校

客月廿七日付庶第三一〇號伺其校学科課程追加之件認可ス

明治廿八年九月五日

文部大臣侯爵西園寺公望

(同右)

なお、当時の新聞を見ると、左記のように、鍛金科設置を日清戦争後の刀剣類に対する再評価の機運に乗じたものとする見方もあったことがわかる。

### ○美術学校の鍛金科

東京美術学校にては来る九月より鍛金科なるものを新設し金屬の鍛錬をなす由は豫て紙上に記載せしか今其の趣旨を聞くに元來我國の鍛金術は古來より發達し刀劍武器類の鍛錬に至りては殊に日本人の絶技に屬し明珍の兜に於ける正宗の刀劍に於ける決して外人の摸擬する能はざるものあり然るに近來斯術の衰へたるより明珍正宗等の名工は勿論其第二三流に位するものすら世に出でず他の繪畫彫刻の如きは種々の機関を設けて之か製作を奨励すれども鍛金に至りては之を顧みるものさへなかりしが昨年日清戦争以來は世人又た武器の利鈍に注目し従つて刀劍類の製作を説くに至りたれば此機會を利用して鍛金科を設け刀劍武器等を始め其他一般の金屬を鍛錬

し古人に耻ざる名工良家を出たし益々以て我國の美術を發揚せしめんとて扱こそ此新設を見るに至りしなりと

(明治二十八年六月三日『報知新聞』)

## 2 第四回内国勸業博覧会への出品

『第四回内国勸業博覧会審査報告』(明治二十九年四月二十五日発行)の第五部第三十八類(教育)審査報告(報告審査官手島精一)に次のように記されている。

### 東京美術学校

東京美術学校出陳ハ美術工藝科中彫金蒔繪ノ二科ニ於ケル實習順序ヲ示スヘキ手本及其使用道具ノ標本類三十一點ニシテ順序整然其成績頗ル觀ルヘシ抑々我邦ノ美術ハ宇内獨特ノ妙技トシテ夙ニ中外ニ賞讃セラル、モノアルハ他ノ摸擬シ得ヘカラサル特殊ノ色相ヲ具有スルニ外ナラス然レトモ世運ノ變轉ニ伴ヒ師傳繼承ノ道漸ク廢滅ニ屬セントスルニ方リ本校ノ如キ美術専門學校ノ創立セラレ繪畫彫刻及美術工藝中彫金蒔繪ノ諸科ヲ設ケ以テ此等技術者養成ノ道ヲ啓カレンハ斯道ノ爲メ洵ニ慶賀スヘキコトナリトス

本校ハ明治二十年ノ創立ニ係リ其二十二年業ヲ開キ其二十四年始メテ卒業生ヲ生セシ以來本年ニ至リ通計實ニ二百四名ニ及ヒ現ニ就學セル生徒モ亦百八十九名ナリトス而シテ卒業生ハ自營ノモノ其多キヲ占メ各々學修セル所ノ業務ニ從ヘルヲ以テ觀ルトキハ其世益ヲ致ス蓋シ鮮少ナラサルヘシ

聞ク同校ノ授業ハ單ニ一方ニ偏セス固ヨリ舊套ニ泥マス時勢ノ變遷ニ伴ヒ之カ開導ヲ圖ルヲ以テ主旨トシ例ヘハ繪畫ニ於テ廣ク諸流名流ノ師

ヲ延キ又ハ更ニ西洋美術ノ科ヲ設ケントセル等用意周到ナリト云フヘシ  
況ンヤ本校教官ハ一意先進ノ責ヲ盡シ汝々後進ヲ誘掖シテ倦マサルカ如  
キ我邦美術ノ前途豈ニ多望ナラスヤ

同博覧会は四月一日から七月三十一日まで京都で開催された。本校教官  
の出品作の主なものには橋本雅邦筆「龍虎」、「十六羅漢」、川端玉章筆「桃  
李園独楽図」、高村光雲作「木彫団扇の上の睡猫」、石川光明作「鶏」等で  
あつた。

### 3 科外講義・近世美術展覧会等

学校当局は科外講義、近世美術展覧会と同時に第二回授業成績物展覧会  
も開き、さらに校友会は臨時大会（作品展）を開いた。『錦巷雜綴』第五  
卷（明治二十八年六月二十六日）はこれらについて次のように記録してい  
る。

#### 校友会臨時大會展覧會

明治廿八年五月十五日ヨリ向フ一週間ヲ期日ト定メ本校々舎ニ於テ展  
覽會ヲ開設ス此ノ舉ハ昨春四月本校創立以來五週年ヲ經テ初テ成績品展  
覽會ヲ開キ世ニ公示シタル以テ嚆矢トシ今年ハ第二回目ナリ而シテ此ノ  
展覽會ニ於テハ昨春以降ノ製作ニ掛ル本校職員生徒ノ成績ハ勿論殊ニ臨  
時大會ノ爲メニ會員ノ意匠經營ニ成ル處ノ優等品ヲ以テシ參考品トシテ  
ハ文化文政以後現今ニ到ル迄凡ソ七十有餘年間ニ於ケル諸大名匠ノ手  
ニ成ル處ノ作ヲ蒐メテ展覽スルトセリ又開會中ハ毎日午後一時ヨリ課  
外講義ヲ開キ内外ノ碩學名士ヲ招聘シテ美術ニ關スル講話ヲ依頼セリ聽  
講者ハ本校ノ職員生徒ハ申スニ及バズ特ニ刷出シタル聽講券ヲ持參セル

有志者ヲシテ入場ヲ許シタリ其出席講演セラレタル講士ハ矢野文雄佛人  
トロンクワー杉浦重剛志賀重昂三宅雄次郎三宅米吉金子堅太郎井上哲次  
郎坪井九馬三校長岡倉覺三教授福地復一竹内久一ノ諸氏ニシテ各々斯ノ  
道ニ涉リ平素抱懷セラル、卓説ヲ陳述セラレタリ其高論ハ本會特ニ速記  
者ヲシテ筆記セシメ置キタレバ別ニ印刷ニ附シテ近日諸君ノ覽ニ供スル  
アル可シ其論說評論ノ如何ハ過眼一遍目ヲ諸君ノ評價スル處ニ任セン  
ノミ

展覧會ニ就テハ特別通常二種ノ觀覽券一萬枚ヲ發出シテ貴紳名族有志及  
ヒ本校ニ關係アル者ノ間ニ配布シ觀覽ヲ促シタリ特別券携帶ノ紳士ニハ  
別ニ茶菓ヲ饗シテ接待セリ會場ハ前回ノ通り本校教場ヲ數區ニ分チテ陳  
列シ本館階下ノ諸室及ビ新館ノ階上ヲ以テ參考品展覧場ニ充テ本館階上  
ノ諸室ヲ通シテ授業成績品及ビ校友會陳列場トシ會議室ヲ來賓接待所ニ  
供シ講演ハ第一講義室ニ於テセリ先ツ第一區ヲ始メ參考品乃チ文化文政  
天保以來明治ニ至ル工藝品ノ金工鑄物陶磁器詩繪繡物織物等第二區同時  
代ノ彫刻類第三區以下ハ繪畫ニシテ此區及ビ第四區ハ文晁派文人派第五  
區狩野土佐ノ諸派第六區ハ四條丸山容齊派第七區ハ浮世繪派ニシテ此等ノ  
繪畫彫刻器物類ハ本校博物館美術協會等ノ所有ニ掛ルモノモ少ナカラズ  
ト雖本回ハ都下ノ名門豪家所藏家ノ秘藏スル處ノモノヲ請テ開會中展覧  
スルモノニシテ豫定ニ反シ蒐集スルト頗ル夥シク畫幅ノ如キハ就中名幅  
逸品ノミヲ撰ミ出シテ陳列シ會場ノ過半ハ參考繪畫ノ爲メニ供セシニモ  
不系到底一時ニ展覧スル能ハサルヲ以テ期日中再度引代ヲ爲スノ不得已  
サルニ至レリ隨テ澤山ノ幅物中ニハ未タ世間ニ普ク識ラレサル珍奇優逸  
ノ傑作モ少ナカラス大ニ斯道有志ヲシテ參考ノ資トスルニ足レリ然レモ  
此期間ハ我美術沿革史中最モ底度ニ沈淪セル時ニシテ尚ホ此有數ノ逸物  
アリシハ誠ニ意外ノ決果ト云フベシ此期美術ノ詳細ナル批評ハ福地教授

ノ近世美術趨勢及ビ列品ノ批評ト題スル講話及ビ岡倉校長ノ講話ノ筆記ニ就テ見ラルベシ次ニ階上校友會陳列室ニ第八區會員出品ノ繪畫第九區同ク彫刻工藝品第拾區同繪畫ニテ此處ニハ教授諸氏ノ製作品ヲモ出セリ勝園雅邦先生ノ筆ニハ春日聽鶯ノ圖富岳ノ圖舞子濱之景四季山水ノ圖等最モ注目スル處ノ作ナリキ玉章先生ノ作ニハ蓬萊之圖東台櫻花ノ圖高砂之圖等見ヘタリ其他若手ノ作ニハ菱田三男氏ノ筆ニ成ルモノ頗ル多クシテ前途有望ノ曙光ハ紙面ニ顯表セリ中ニ此二枚折屏風美人ノ圖ハ優レテ見エ下村晴三郎氏ノ朝霧二枚折屏風モ相變ズ古土佐ノ氣格高キ處ニ範ヲトリ簡單洒落ノ圖柄ハ最モ此屏風ニ適テ妙ヲ覺ユ天草友雄氏又屏風ヲ撰テ筆ヲ採レリ其圖題ハ寡婦ナリ其情ヲ寫シテ至レリ同感ヲ起サシムルニ足ル然レモ其紙面ハ屏風ナリ屏風ハ如何ナル處ニカ用ユル何ナル時節ニカ應スル美術トシ繪其レ自身ノ價值ハ質サズ屏風ノ圖トシテ問フ處アルノミ妄言ハ扱テ措キ本回校友會出品ノ点数及ビ賣上点数數優等品受賞者ノ姓名ヲ左ニ列載ス

出品種類

出品種類	点数	賣上点数
繪畫	百四十八点	一四二点
彫刻	四十五点	三三二点
鑄金	五十一點	一四二点
彫金	三十五点	三二点
蒔繪	百点	三四点

明治廿八年五月大會受賞者

繪畫之部

賞牌

美人之圖 新按  
朝霧之圖 全

菱田三男治  
下村晴三郎

寡婦之圖 全  
元祿人物圖 全  
樓閣山水圖 全

一等褒狀

遠藤盛遠之圖 新按

淡沫奔湍之圖 全

二等褒狀

驚之圖 新按

妙音天圖 全

月夜山水圖 全

山水圖 全

普賢之圖 全

水禽山水圖 全

社頭山水圖 全

彫刻之部

賞牌

丸彫鹿 摸刻

全 彫觀音 全

全 鸚哥 寫生

全 鷄 全

一等褒狀

丸刻鷄 寫生

全 軍鷄 全

全 虎 新按

薄肉仙人 摸刻

天草友雄  
岡本勝元  
藤卷直治

木村信太郎  
中村端三

櫻井節雄  
井上良慶

高橋勇  
丹羽五十吉

大石榮雄  
山本昌

加藤紀高  
村尾平吉

管原大三郎  
信谷友三

野村厚生  
鮎澤秀夫

澤藤太郎  
松原源藏  
中川万次郎

二等褒狀

〔羊〕  
羊肉鶴 新按

全 獅子 摸刻

全 面 全

彫金之部

一等褒狀

彫金手板鬼瓦 摸刻

全 鯨 全

二等褒狀

彫金片切扇面形加茂ノ圖 新按

全 手板靈芝 摸刻

全 雷紋 全

鑄金之部

一等褒狀

鴛鴦香爐 新按

龜置物 全

蠟型菖浦額面 全

二等褒狀

獅子香爐 新按

蠟型蓮花額面 全

全 牡丹額面 全

蒔繪之部

賞牌

描金忍草棗 新按

一等褒狀

中村久馬三

佐藤勝磨

天岡均一

清水龜藏

海野豊太郎

望月銃三郎

小泉永雄

芦澤鴻次

武井眞淑

山本茗次郎

太田和太郎

郡司秀次郎

坂口純

鈴木一

原田博亮

描金鳶高時繪棗 新按

全 夕顔高時繪棗 全

二等褒狀

描金雕鳩高時繪丸盆 新按

全 飾盃 全

開會後慰勞兼親睦會ヲ向嶋八洲園ニ催サル其委細ハ可明氏ノ漫録記事ニ

付テ見ラレヨ

石河壽衛彦

近藤延太郎

磯谷邦之助

澤木彦門

#### 4 生徒募集

○東京美術學校生徒募集

東京美術學校に於て本年九月同校豫備の課程を履修すへき生徒男子五十五名入學せしむるに付同校規則入學規程に依り美術上特に見込ある者と認むるときは本縣に於て特選するを以て志願の者は七月三十日限本縣知事宛願書に履歷体格検査証及試験科目第七若しくは第八に該る圖畫若しくは彫刻にして一兩年以降の製作に係るもの内適當と自認せるものを添へ差出すへしと昨日九十五号を以て告示せらるる志願者參考の爲め規則を左に掲ぐ

一 入學者資格

年齢滿十六年以上滿二十五年以下にして品行善良身體健康稟性美術の技能を有し將來繪畫彫刻及美術工藝（目下彫金、鑄金、蒔繪、鍛金の四科を置く）の諸技に従事し若しくは普通圖畫の教員たらんと欲する者

一 試験科目

○（一）讀書和漢文○（二）作文漢字交り文○（三）數學算術及平面幾何○（四）地理日本及萬國地理大要○（五）歴史日本及支那歴史大要○（六）物理學及化學大要○（七）舊畫及新畫流派及材料を問はず

○(八) 彫刻模造及彫刻圖案同上

一 前項第一より第六に至る課目の試験は尋常中學校第三年級の程度に準し本縣に於てこれを施行す但本人の履歴に依りこれを省くことあるべし

又第七第八の課目は本告示本文に記載せる舊作の外新に本縣に於て圖畫或は彫刻の一課目を左の制限に應じて圖畫は一日以内彫刻は三日以内に製作せしむ

一 圖畫 著色を用ひず十分の濃淡を施したるもの四尺に二尺五寸以下一尺四方以上

一 彫刻 浮彫牛肉二尺四方以下五寸四方以上彫刻の全体若くは一部分

一 前項の製作品は總て美術の趣致を主とし流派及用材用具に拘はらず人物山水花鳥器物等題旨の何たるに論せず自己の新按に成り且甚たく簡易疎策に失せざるを要す

一 願書と共に差出すべき舊製作物は新按若くは舊模たるに拘はらず前項の主旨に準し専ら作者の長所を示すべきものにして製作の時間を明記し併て自己の製作物たることを證明するを要す

一 製作物は運搬の際毀損の患なからんことを注意すへし其返戻を要するものは特に之を明記すべき事  
但右運搬費は自己の負擔とす

一 前各項の内詳細は明治二十五年十一月二十四日の官報教育欄内に掲載せる東京美術學校規則に就きて見るべし

(明治二十八年七月四日『秋田日々新聞』)

5 生徒成績物御買上げ

この明治二十八年八月三日以後、同二十九年十二月四日、同三十年十月二十一日と続けて生徒成績物(一部教官も含む)を天覽に供し、御買上げがあったが、この件に関する本校側の公式記録文書類は現存せず、『錦巷雜綴』第九卷(明治三十一年二月)にのみ記録がある。左にそれを転載するが、参考のために宮内省調度局作成文書「御用度録」(宮内庁書陵部所蔵)に記載されている御買上げの点数、年月、価格を「」に記す。「」の附されていない作品については「御用度録」に記録がなく、また、個々の作品の所在は現在のところ不明である。

○卒業製作品の御買上 聖旨を奉して子爵東園侍從我校に臨まれ當校教育の方法程度等を御下問あらせられたるに依り生徒の製作品を差出すべき旨を傳達せられたるは過る廿八年八月三日を始めとして爾後兩三回成績物を宮内省に差出して 天覽に供したるが其都度 思召を以て御買上あらせられたるもの少なからず今に至りて廿八年の分をも併記するは稍古りたるの嫌なきに非れとも多くの會員諸君中には或は未た之れを知らざるものあらんことを慮り茲に總て之れを掲ぐることにせり

卒業製作の部

俊寛僧都鬼界島圖	繪畫科	西郷 規	
王昭君嫁胡圖	全撰科	本田 佑輔	
秋景山水	〔一枚〕	繪畫科	
秋野鹿圖	〔同〕	丹羽五十吉	明治年・12月 40円
墨畫山水	〔同〕	豊岡保太郎	〔同〕 35
元祿風俗圖	〔同〕	後藤 矩一	〔同〕 38
農家秋景圖	〔同〕	金子 泰	〔同〕 30
	全	濱中半三郎	〔同〕 35

大原行幸圖	〔同〕	全	佐藤榮三郎〔同〕	40
雪景山水	〔同〕	全	田口鎌三郎〔同〕	38
夏景山水	〔同〕	全	平井 富夫〔30・10〕	50
寒山	〔同〕	全	山本 昌〔同〕	50
廢宮初夏圖	〔同〕	全	岡田 秀〔同〕	45
哀別圖	〔同〕	全	高城 次郎〔同〕	40
秋景山水	〔同〕	全	川勝勘兵衛〔同〕	40
春色圖	〔同〕	全	加藤 紀高〔同〕	48
秋郊圖	〔同〕	全	河原崎謙吉〔同〕	50
夏景山水	〔同〕	全	川崎 周太〔同〕	40
黃石公圖	〔同〕	全	小出魯一郎〔同〕	40
神功皇后像		彫刻科	黒岩 倉吉	
大山上和樂使主福常像		全	後藤 省吾	
猿田彦命像		全	増田 有信	
龍銀秋草香爐〔一個〕		彫金科	酒井 秀岳〔29・12〕	120
全 蟹筆架		全	角田宇真藏	
茄子ニ螽斯置物		全	岡部 覺彌	
四神水滴		全	望月銃三郎	
瓶子形花瓶 〔一個〕		全	福島 仲〔29・12〕	100
松島香爐		全	山本 義雄	
石山寺圖香箱		全	大野和歌三郎	
山水圖硯箱		蒔繪科	石川 準禮	
柳櫻圖短冊箱〔一個〕		全	石井吉次郎〔29・6〕	90
紅葉賀香箱		全	玉井 正申	
源氏夕顔圖重子香箱〔一個〕		全	本島袈裟彦〔29・12〕	97

歌繪鼻紙臺	全	河村 博亮
唐櫃形波ニ菊手箱	全	近藤延太郎
源氏葵の卷硯箱	全	磯矢邦之助
源氏蜻蛉の卷々紙箱	全	氏家 静脩
檜葉模様卷葉入盆付〔二組〕	全	萩原元次郎〔30・10〕
卒業製作以外成績の部		
寫生鶏置物	彫刻科	鮎澤 秀夫
全 全	全	野村 厚生
全 鸚哥置物	全	信谷 友三
全 全	全	浅野勇次郎
熊鷹置物	全	菅原大三郎
猿置物	全	頼富 新吉
猫置物	鑄金科	田中 後治
鴛鴦ツマミ香爐	全	武井 眞澄
松島香合	蒔繪科	六角注多良
忍ぶ草模様棗	全	原田 博亮
葛模様棗	全	石川壽衛彦

なお、左記は御買上げの際に本校が提出した文書〔宮内庁書陵部所蔵〕の一例である。

會第六一號

別紙納入告知書壹葉及御送付候也  
明治二十九年六月十八日

東京美術學校  
〔東京美術學校會計掛〕



宮内省調度局 御中

(別紙)

記

一 短冊箱 壹個

右御置上品及御送付候也

明治二十九年六月二日

宮内省調度局 御中

東京美術學校 「同右」 印

(以上東京美術學校名入野紙使用)

同文書中には上記御買上げ一覧表以外の作品に関するものが一件あるの  
で併記しておく。

記

一流シ櫻ニ鳩蒔絵小香合 東京美術學校助教  
六角注多良作

右之通 明治二十九年六月二日

宮内省調度局 御中

六角注多良 「可明」 印

## 6 岡倉校長出張

左記の新聞記事によって、出張の目的は豊公銅像建立の準備であったことがわかる。なおこの依頼製作については本校年報には記載されていない。

○阿彌陀峰の豊公銅像

岡倉東京美術學校校長及び日野西子爵は此程京都に赴き豊公銅像建造に就き阿彌陀峯の地形等を視察し調査中なるか當初は太閤平(豊公の廟ありし處)に建立する見込みなりしも岡倉校長は同所の上の地所を撰定し十

間四方許りの臺石を据へて此處に一大銅像を建立し前設計より規模を大にし豊公の遺蹟を顕著ならしむる意向なる由又た豊公の像は高臺寺、藪内、其他二三ヶ所に木像又は畫像あるにより岡倉氏等は之を一覽し其模寫を帝國京都博物館に囑託したりと

(明治二十八年九月六日『報知新聞』)

### ○銅像の流行

東京美術學校に於て各地より引受たる銅像八七八個に及び其内福岡縣より依頼を受けたるハ日蓮上人高さ丈餘の銅像なるが今回又京都の有志公民より豊臣太閤の實物大の銅像の依頼を受けたり此の像成功の上八京都の公園内に建設する見込の由

(明治二十八年九月十八日『やまと新聞』)

### 関連事項

#### ① 意匠研究会(遂初会)

意匠研究会は岡倉校長、橋本雅邦の指導のもとに絵画や図案の意匠練磨を競う会で、本年六月ごろ発足した。『錦巷雜綴』第五卷(明治二十八年六月二十六日)に次のように紹介されている。

○意匠研究会 今度本校ニ於テ題名ノ如キ一會ヲ起シ繪畫及ビ圖按ノ懸賞ヲ行ハル其趣意左ノ如シ

一本會ハ毎月一回圖題ヲ設ケ繪畫及ヒ圖按ヲ集メ其ノ競争會ヲ開キ主トシテ意匠ノ意味深長品位高尚ナルモノヲ撰ミ賞品ヲ授與ス賞品ハ一等二等ノ二種トシ一等ハ絹地反物二等ハ木綿地反